

第10回 フォローアップ研修会

筑波のふもとと研究学園

日時：2016年10月6日～7日 天気：晴れ

場所：森林総合研究所～筑波山（茨城県）、参加者：指導員26名 他2名

講師：佐野由輝氏 他（森林総合研究所）、田中ひとみ氏 他（つくば環境フォーラム）

初日の森林総合研究所の立派な会議室で、4つのテーマについて講義をしていただきました。牧野俊一氏から「林相による昆虫群衆の変化、生態系サービス」について、エキスをわかりやすく、説明頂きました。スギ林と、広葉樹林の若齢林では、生物種数に差がないのはなぜか との私のレベルの低い質問にも分かりやすい表現で回答いただき腑に落ちました。このあと、黒川紘子氏の「森林の生態系サービスの可視化について」の講義がありました。これは、専門的なお話で、学会とか、講演会でないとなかなか聞くことができない研究についての講義でした。深い研究テーマについて、聴講者のレベルに合わせた分りやすく熱心な熱い講義でした。ビジュアル化、可視化によって、生態系サービスを支える生態系機能の現状を定量的に評価し、将来の変化を予測するという研究を熱く語っていただきました。わかりやすくご説明頂いたのに、理解できたのか、ちと後ろめたさを感じています。LMAという評価も初めて教わりました。葉の寿命とLMAとの相関、葉の寿命との光合成速度の関係は興味深いものでした。

西村 寛（松戸市）

ランチの後、佐野由輝氏が樹木園を案内。日本の各森林帯・亜熱帯・暖温帯・冷温帯・亜寒帯の樹木他、外国産の樹木やタケ・ササ類・サクラの見本園もあり、今年は竹の一種に花が咲いたとのこと。次に安部 久氏から木材標本室の説明。様々な木の見本が、一種についても様々な採取場所の記録をつけて、びっしりと並んでいました。材だけでは何の木なのか分からないものがあるので、葉の押し葉も保管してありました。午後の講義



森林総研の受講会場



樹木園：佐野さんの案内

は、森林教育の研究をされている井上真理子氏。日本の森林は国土の三分の二を占めており、特に戦後植林されたスギ・ヒノキ林が成長して更新する必要があるのに、林業に携わる若者が少なく、今まで学校教育で森林育成技術を教える機会がなかったのが、現在、中学校の技術課程で教えるように文部科学省に働きかけているとのこと。今まで、中学高校生の体力を農業や林業などに使わないのはもったいないと私も思っていたので大いに期待したいです。4時限目は野生物、特に森林被害について、小泉 透氏の講義。シカは日本列島、北から南まで住み、1才で母になり、16才まで毎年お産する。天敵もなく、ハンターも少なく、食害で森の下層植生がなくなり、土砂が流出、国土保全上問題となっているとのこと。花立良江（佐倉市）

「活動事例と活動のヒント」 田中ひとみ氏（つくば環境フォーラム代表）

夕食後は楽しい魅力あふれる実践報告を伺うことが出来、明日への期待が高まりました。壮大なプロジェクトの説明を頂き、開発からわずかに離れた里山の再生へ、オオムラサキの棲む里山づくりを通して実践し、着実に成果を上げてきている報告、同時にオオムラサキの幼虫救出、飼育をきっかけとした子ども達への自然体験・環境教育プログラムの取り組みなど。谷津田の保全では企業への積極的な参加の呼びかけ、雑木林の整備には地域住民への理解と協力を得るなど、様々な活動に取り組む視点の大きさ、素晴らしさに感銘を受けました。さらに、子ども達への環境教育プログラムで使用する創意工夫に富んだアイテムには非常に感心しました。オオムラサキの一生を視覚化するに際し、使用した模型の精巧さ(手作りの温かさが感じられる縫いぐるみの見事さ！)に、圧倒されました。「つくば環境フォーラム」の様々な取り組みが有機的につながり、仲間を増やしていく活動を中心的に担い、そのエネルギーと発想の豊かさに裏打ちされた田中氏の手腕に感動しました。



オオムラサキの縫いぐるみ

平田稚江子（千葉市）

二日目は朝から晴れ、6時半より自由参加の裏山散歩は殆どの方々が集まり、田中ひとみさんのご案内で出発、ヤマザクラ・クリ・クスギ・コナラの生えている雑木林の中での説明を聞きながら、日本武尊が立寄ったとの説のある白瀧神社まで行き、1時間後に戻ってきて、朝食になる。「筑波ふれあいの里」を出発の前に何故か音楽が鳴り、ロビーにてラジオ体操が始まった。

バスにて筑波山神社に着き、本殿横に生えている市の天然記念物のマルバクスの樹を



田中ひとみさんの案内で早朝の自然観察

見た。葉が著しく丸くてこの木をもとに命名されたとの事、なるほどと思われる丸い葉が落ちていた。筑波山地域はこの9月に大地の遺産として保護するジオパークに認定されたそうです。

ケーブルカーにて山頂へ、まずは紫峰杉を見に、紫峰とは筑波山の雅称です。この杉の手前で大きなブナの樹に出会う、筑波山のブナの中でも最大級の大木で、胸高直径は125.6cmとある「ブナ爺さん」として親しまれている樹だそうです。ここでソウシチョウの群れを見る、“相思鳥”は特定外来生物に指定されているが、筑波山には多くいるとの話でした。ここから少し下がって男女川源流の前で紫峰杉を見る、いつも見ている杉とは全く違って枝が四方に張りだし、幹周り7m、推定樹齢800年と書いてある、公募によって名前が付けられた樹だそうです。ブナもスギも幹はごつごつして枝はぐにやぐにやと出ており、何か別の種を見ている様だった。

筑波山は、標高 700m 以上は冷温帯気候でブナが生える場所として特別保護地域になっている。太平洋側のブナは色々な他の樹木が混じったり、幹はごつごつ、枝は四方に伸びて、葉は小さく別名コハブナともいう。白神山地の人が見に来てブナの違いに驚いたとの事です。その後は牧野富太郎博士が日本人として初めて学名をつけて有名になったヤマトグサを見た後にブナ広場へ、倒木の大きなブナとその隣には、筑波山で種を取って育てた 20 年もの若いブナがあり、ブナの天然更新の難しさの話があった。

ケーブル駅の二階で開催されている“筑波山の自然展”に顔を出す。小動物の剥製から茸の標本、パネルの写真などを見る。真中のテーブルでは はがき に乾燥した葉を乗せてパウチ状にするオリジナルな はがき作りをしたり、クイズに答えるなど楽しい時間を過ごす。



筑波山の自然展のコーナー

11 時に集まり、記念写真撮影の後に自然観察路での観察が始まる。つくば環境フォーラムの野村さんも加わり、二班にて歩き始める。筑波山は地下深くマグマが固まって出来た岩が時代と共に隆起し、風雨に浸食されて出来た山で、足元にある岩石は斑れい岩との話。大きな屏風の様な間宮林蔵が祈願した立身石の頂にあがり、真下の神社から山麓が遠くまで見渡せる景色の素晴らしさに感激する。観察路の北面にはブナの下にはスズタケの群落だが、南面の地面近くはアズマネザサが茂り、アカガシも大きな幹になり、冷温帯と温帯の植生が混成する場所になっていた。東日本大震災で岩が崩れ、観察路が閉鎖され、迂回路になっている道を進み、男体山の登山道を途中から下って御幸ヶ原に戻ってくる。御幸ヶ原では遠足なのか小学生が団体で女体山方向から次々に現れ、大勢の人で溢れていた。昼食後はケーブルカーにて山を下り、今日の最後の観察場所である「葛城の森の見学」へ移動する。オオムラサキの保存・育成から始まった森づくりの場所を見て歩く。「マイツリー作成」にて皆が植えた木に名前をつけたのを見た。広大な土地をフォレスト制度にて整備して、行政、企業ともタイアップして森づくりを進めているとの環境フォーラムの遠大な話に、是非うまく進んでいって欲しいと感じました。



葛城の森の見学

森林総研の佐野さん、つくば環境フォーラムの田中さん、協議会研修担当の皆さんのお陰で、楽しい二日間の研修会に参加出来たことに感謝とお礼を申し上げます。

小島紀彦（我孫子市）